

成長する企業には独自の戦略がある。企業の今を、そしてこれからを創るその戦略に迫る

# 明日を拓く企業の戦略

Strategy of the company to open up tomorrow

第三五回



同社が笠岡市神島に建設したサービス付き高齢者向け住宅。公共施設、社屋、病院や特別養護老人ホームなどの福祉施設、ロードサイドの店舗や大型商業施設など、時代のニーズに合わせて、デザイン性や環境に配慮した多様な施工実績を積んできた

## (株)重藤組

### チャンスをつかみ決断と大胆な若手登用で地域に貢献する建設会社へ

昭和37年の創業以来、公共施設や地元企業の社屋、病院や福祉施設、大型商業施設など、多数の建設工事を手掛けてきた(株)重藤組。着実に業容を拡大し、年商約70億円の企業に成長を遂げてきた。

厚生労働省や民間調査会社などの調査で、常に人手不足の業種として上位に挙げられる建設業にあって、同社は人材の確保・活用に向けた取り組みで成果を上げている。昨年の創業60周年を新たなスタートとして、更なる飛躍を目指す重藤武士代表取締役社長に話を聞いた。



聞き手・執筆  
井ノ上美恵子  
(フリーアナウンサー)

#### チャンスをつかみ経営基盤を強固に

(株)重藤組は昭和37年、岡山市七軒町(現在の北区南中央町)で創業、翌年に株式会社に移行し高度経済成長の波にも乗って、地域密着の建設会社として発展してきた。

現社長の重藤武士氏は大学で土木を学び、大阪の土木工事会社で現場経験を積んだ後、昭和61年に入社する。当時は15人ほどの社員で、「あの頃は依頼があればどんな仕事でも引き受けていましたね」と振り返る。

バブル景気の真ただた中、遊技業店舗の立体駐車場建設の依頼を受ける。当時の年商は12億円ぐらいいで、ほぼ同額の仕事であった。資金

繰りなどの面で無謀な受注とも言われたが、全社挙げての取り組みは施工期間、内容、コスト面などでの高評価につながり、県外からも仕事を受注するようになる足掛かりとなった。現場を重ね技術を磨き、バブル崩壊の荒波を受けながらも会社は成長を続けてきた。

平成14年、重藤氏は42歳で父親から社長を引き継ぐ。会社の発展には知名度と信用力のアップが必要不可欠と、公共工事や大手企業からの受注に力を注ぐが、2年後に先代社長が亡くなり、古参の中心社員の退職や、国の政策転換による公共工事の削減などによって

厳しい時代を迎えることとなった。

こうした時に舞い込んだのが、水島臨海工業地帯のLPGトンネル工事の一次下請けの打診であった。土木にも本格的に守備範囲を広げることが念願であった重藤氏にとっては千載一遇のビッグチャンスだった。

これほど大きな土木工事の経験はなく、社内には不安もあったが、「私の信念は『動くこと』、一歩を踏み出すことが重要ですよ」と語る重藤氏は社員を鼓舞する。培った技術力で工事は完遂され、事業領域の拡大によって後の経営基盤を強固にすることができた。

#### 大胆な若手登用が社業発展につながる

同社では、タブレットやスマートフォンを活用して、現場のWEBカメラ映像やクラウドにある録画映像で状況を確認したり、その画像を見ながらリモート会議で取引業者と進捗確認したりするなど工事現場のIT化を推進してきた。これによって現場と会社間の移動時間がなくなり、省力化・効率化が進んだほか、社内の情報共有にも寄与している。

報告業務もオンライン化し、帰社する必要もなく残業も減少。職場環境の改善にもつながった。こうした取り組みは、ITの知識も豊富な若い社員の意見を大胆に取り入れたことで実現したものだ。

また、採用活動でも若手社員を登用している。20代の社員7人で編成された採用チームがミートイングを重ね、自社の強みはもちろん弱みについても検証し集約したことを、建設業界の現状も含めて企業説明会等で学生たちに率直に伝えることに努めた。

ITを活用した職場環境の改善や、若手社員による採用活動は学生たちの共感を得るところとなり、来春卒業予定の大学生を対象にした地元新聞社による地場企業の希望就職先ランキングでは、去年の90位から13位へと大きくランクアップすることとなった。建設業におい

てはトップだ。

とりわけ驚かされるのは、女子学生の人気度が17位と高いこと。男性社会的なイメージが強い業界として異例とさえ言える。同社では女性社員15人のうち、6人は施工現場担当として従事しているが、こうした女性が活躍できる社風が根付いていることと無縁ではないだろう。

#### 未来志向で地域社会に貢献

SDGsへの取り組みとして、同社では工事現場の仮囲いをハンディキャップアーティストの作品で彩るプロジェクトを令和2年から始めている。障がい者を支援し福祉サービスを展開する岡山市内の多機能型事業所とライセンス契約を結び、デザイン使用料の70%がアーティスト自身に支払われる仕組みで、「障がい者の継続的な収入向上」と、「工事現場の景観イメージアップ」を目的としたものだ。

また、将来を見据えて事業の多角化にも着手し、去年7月に警備会社を立ち上げた。建設現場での安全確保という母体の建設業とのシナジーも狙っているが、地域の人たちが安心して暮らせる社会づくりを目指していることでもある。その他にも人材派遣、人材教育・育成、広告宣伝の3つの分野で新会社設立を計画している。

意欲的な新事業を矢継ぎ早に進める重藤氏は、「社長は夢を語ることが大事。社員と夢を分かち合い、ともに前に進んでいきたいのです」と語る。現在は年商約70億円、正社員85人の会社に成長した。岡山市の新庁舎建設など大規模プロジェクトへの参画も続いている。近年は外国人労働者の活用にも積極的だ。性別や国籍を問わず多種多様な価値観を持つ人材を受け入れ、今後も社員と一丸となって地域社会に貢献できる会社を目指していく。



業務のIT化や採用活動など若手社員の意見を積極的に採用。働きやすい職場として女性からも注目を集めている。若手社員が活躍できる会社としてさらなる成長を目指す



工事現場の仮囲いシートをハンディキャップアーティストの絵画で彩るプロジェクトを実施。ライセンス料の70%はアーティストを描いたアーティスト本人の収入につながる仕組みとなっている



重藤武士氏はゴルフと車が趣味。今年63歳でA級ライセンスを取る行動派。趣味のゴルフを通じて多くの人脉を得たという。入社当初から重藤組というブランドの確立は社業発展に不可欠と考え、公共事業や大型施設の建設などで地域の社会基盤を整える事業に取り組む



本 社 岡山市南区福成3-6-22  
事業内容 公共建築工事・土木工事・設計・施工・一般建築  
代表者 重藤 武士  
創 業 昭和37年(1962年)  
資本金 8,800万円